

感情語刺激に伴う表現運動の空間特性に関する実験的研究

— 中学生・小学生を中心に —

畑野 裕子
平井タカネ

I 研究の目的

舞踊に関する研究は構成要素や表現内容などさまざまな面からなされているが、私達は先に女子大学生について、舞踊の内的要素である感情と外面的構成要素である空間の間連性を明らかにするために、基本的感情語の表現に伴う空間の質的・量的特性の検討を試みた(舞踊学4・1981)。その結果、空間床面の中央部は動きやポーズをよくみせる位置として意味づけされていること、感情との関係では「喜び」の「前」に対して「悲しみ」の「後」、「怒り」の「右」に対して「恐れ」の「左」という空間使用の傾向を認めた。そこで、今回はこのような空間使用の傾向がいつ頃学習されるものであるかについて、中学校1年生・小学校1年生を対象として、年齢の視点から比較検討する。

II 方法

1. 被験者：
中学校1年生、
小学校1年生、
いずれも男子
16名女子16名
の32名ずつ、
計64名。

2. 実験空間
と装置：空間
は図1に示し
たように25領
域(P1~25)
に区分し、被
験者の前方か

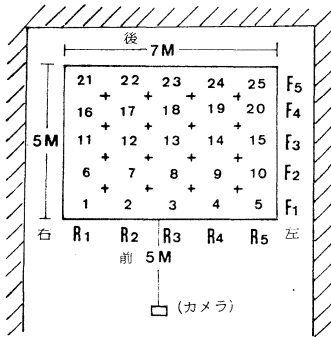


図1 実験空間

ら後方へF1~5、右側から左側へ向ってR1~5とし、被験者の動きと空間を全てVTRに録画した。

3. 刺激語：女子大学生の場合と同様、プルチックによって基本的な純粋情動であり、しかも強度も同じくらいであるとされている「喜び」「悲しみ」「怒り」「恐れ」⁴⁾を感情語として取りあげた。

4. 実験手続き：実験Ⅰ：移動運動を含めた動作による表現、実験Ⅱ：移動運動を伴わないポーズだけによる表現、であった。ただし小学校1年生については実験Ⅰのみ行なった。

III 結果

移動を含めた表現は、VTRからトレースしたフロアパターンにより、各領域への踏み込み総回数(P1~25, F1~5, R1~5)ならびに使用領域数を求めて集計し、分散分析を行なった。またポーズ表現については、P1~25, F1~5, R1~5ごとにポーズ総数を集計し、分散分析を行った。

1. 中学校1年生の場合

実験Ⅰ：移動を含めた表現

1)空間の広さすなわち使用された領域数(最高は25領域)は、分散分析の結果感情の主効果が有意であり、「喜び」は他のいずれの感情よりも有意に多くの領域を使用した。

2)使用空間の量

各領域における踏み込み総回数を図2に示した。分散分析の結果、感情の主効果は、空間の主効果はいずれの区分でも有意であった。また感情と空間の交互作用はP1~25, P1~5の区分において有意であった。

まず、各感情ごとの踏み込み回数
の延べ総数は「喜
び」が有意に多く、
次に怒り、恐れ、
悲しみの順であ
った。

次に4つの感情を含めた使用空間は、図2に示したようにP1, P2, P3, P4, P5の最前列F1の使用が有意に少なく、R2やR4という中側の使用が有意に多かった。

感情別に使用空間をまとめると、

①喜びは、最前列F1や最後列F5が有意に少なく、特にP1, P5, P21, P25という四隅が著しく少なかった。前列F2の使用は喜びのときかなり多かった。

②悲しみは、最後列F5(P22, P23, P24)とF4が他のどの列より有意に多く、最前列F1の使用は最も少なく有意であった。

③怒りは、最前列F1(中でもP1, P4, P5)が有意に少なく、右側の方が左側よりも多く使用される傾向がみられた。

④恐れは、最後列F5(P22, P23, P24, P25)やF4の使用が有意に多く、左側の方が右側よりも多く使用される傾向があった。

実験Ⅱ：ポーズ表現

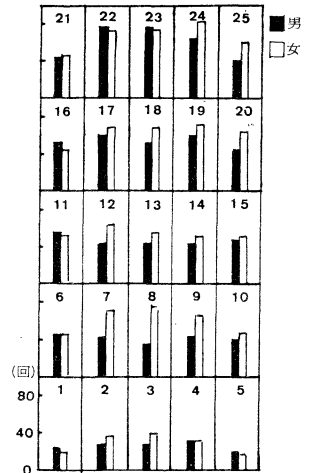


図2 4つの感情を含めた
踏み込み総回数
(中学生)

ポーズの数について分散分析した結果、空間の主効果、感情と空間の交互作用、男女のグループと感情の交互作用が有意であった。

まず4つ感情を含めたポーズ表現の空間は、真中の使用が有意に多かったが、一方最前列 F_1 (P_2, P_3, P_4) や F_2 (特に P_{10}) の使用がいずれも有意に少なかった。

次に、感情ごとの使用空間をまとめると、

①喜びは、 F_3 や R_3 の使用が多く、いわゆる中央部の使用が顕著であった。

②悲しみは、 P_{21}, P_{25} を含む最後列 F_5 が有意に多かった。

③怒りは、 F_3 (特に P_{13} と P_{12}) や R_3 (P_{13} と P_8)、さらに R_2 など中央や右側の使用が有意に多かった。

④恐れは、最後列 F_5 (P_{21} と P_{25}) や F_4 (P_{18} と P_{17}) など後の使用が有意に多かった。またわずかに左 ($R_4 + R_5$) が右 ($R_1 + R_2$) より多い傾向がみられた。

なお、移動を含めた表現とポーズ表現の各領域における使用数の相関は、すべての感情で正の相関であった。

2. 小学校1年生の場合

空間使用の結果を図3に示した。

1) 空間の広さは、分散分析の結果有意でなかった。

2) 使用空間の量
分散分析の結果、感情の主効果、感情と空間の交互作用はいずれの区分でも有意であり、 $P_1 \sim 25$, $F_1 \sim 5$ 区分で、空間の主効果が有意であった。

まず、4つの感情を含めた使用空間は、図3に示したように P_2, P_3, P_4 を含む最前列 F_1 が有意に多く、 P_8, P_{18}, P_{13} を含む中央部の領域が有意に少ないという、円周を描くような傾向がみられた。

次に感情ごとの踏み込み総回数は、喜びが有意に多く、次に怒り、恐れ、悲しみの順であった。

感情ごとにまとめると、

①喜びは、最前 F_1 (P_2, P_3, P_4) の使用が有意に多く、 P_{18}, P_8, P_{13} という中央の使用が少ない傾向にあった。

②悲しみは、他の感情に多い最前列より F_3 が多

い傾向があった。

③怒りは、最前列 F_1 (P_2 と P_3) の使用が有意に多く、中央部の $P_8, P_{19}, P_{14}, P_{13}$ が有意に少なかった。

④恐れは、統計的に有意ではなく、 F_1 が多い傾向があった。

IV 論 議

4つの感情を含めた全体的な特徴として、中学1年生は中央部を最も多く使い、最前列は最も少なかったが、一方小学生は最前列が最も多く、中央部が最も少ないという異なる傾向がみられた。これは、中学生が中央部における動きやポーズが他の場所でもよくみえること⁵⁾を種々の経験や学習を通して知っており、意図的に中央部を使ったと考えられる。また中学生が最前列をほとんど使用しなかったのは、精神的発達の特徴³⁾や、最前列はカメラに最も近く、いわゆる場の圧力が高いこと²⁾などがあげられる。一方小学1年生は、中央部空間の特性についての経験や学習が少ないと同時に、中学生にみられるような身体的側面に対する自己意識の集中³⁾がなく、むしろカメラに近づいて撮ってもらおうとして最前列を多く使用したと考えられる。

中学校1年生は、比較的女子大学生と同様の傾向(喜び=前、悲しみ=後、怒り=右、恐れ=左)¹⁾を示し、空間の特性と感情の表現内容とが対応して意識されていることから、舞踊の基本的要素の1つである空間構成に関する学習が可能であると思われるが、表現運動に伴う「からだやからだの動きが他人にみられること」に対する恥ずかしさを取り除く工夫が必要である。

小学校1年生は、空間使用に感情の特性があまり認められず、表現内容は理解していても、空間の特質との関連性についてはほとんど意識されていない。したがって、感情の中でもうれしいや楽しい気持ちの表現は十分可能と思われるが、空間構成を伴う表現学習は小学校1年生では今少し無理かと思われる。

V 文 献

- 1) 畑野裕子, 平井タカネ: 感情語刺激に伴う表現運動の空間特性について, 舞踊学4, 18-20, 1981
- 2) Lewin, K.: 上代晃訳, 心理学的力の概念的表示と測定, 理想社, 81-84, 1956
- 3) Mussen, P. H. 三宅和夫訳, 発達心理学II, 試信書房, 656-661, 1968
- 4) Plutchik, R.: What is a Emotion? The Journal of Psychology 61, 295-303, 1965
- 5) 渡辺江津: 創作舞踊の空間形成に関する実験的研究——主として美的空間配置について——, 東京学芸大学研究年報, 281-300, 1961

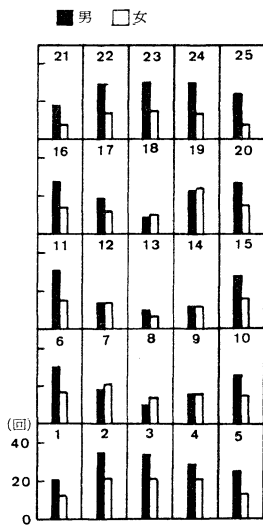


図3 4つの感情を含めた踏み込み総回数 (小学生)